
いつの日かの思い出(仮)

カイノコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつの日かの思い出（仮）

【Nコード】

N5620P

【作者名】

カイノコ

【あらすじ】

僕はどうしても知りたい。お姉さん達の言葉を。
まだ幼いからと答えをもらえないこともある。
でも、それは僕にとって幸せでもあるんだ。
よくわからないけど、そうらしい。

ぶろろーぐ？

初めての日…なんて覚えていないけど最近だってことはわかっている。

僕は今こうしてここに在るのだから。

同じ背丈の子たちと共に過ごすのは何日目だろう？

うちのお母さんより豊かなおっぱいのお姉さんはなんだか偉そうだけど僕たちを見る目がなんだか暖かい。

たまにお姉さん同士が話す言葉はわからない時があるけど多分この人達は頭がいいんだろう。

「さあ、そろそろ時間ですよー」

次第にみんなが眠りから起きだす。

僕は退屈なお昼寝の時間をたそがれながら過ごした。

はあ…僕、お家以外で眠れないんだよなあ。

ぶろろーぐ2? (前書き)

僕はここ数日前から「香乃保育園」に通いだした。

なんかそれが普通らしい。

生まれてからずっと家の中にいたから正直不安だ。

何が不安だって? お父さんとお母さん、それに親戚の人達やお姉ちゃん以外の人と関わるからだ。

僕は頭がいいから知っている。この世にはいい人と悪い人がいるってことを。

絵本で読んだんだが悪い人は人に意地悪したりする。

僕はそれが不安…いや怖かった。

それは僕自身が悪い人じゃないかということも思っていたからだ。

…みんないい人だった。

世の中はこんなにもいい人がいっぱいいたんだ。
それがここ数日香乃保育園に通った結果だった。

ぶろろーぐ2？

初めての日…なんて覚えていないけど最近だってことはわかっている。

僕は今こうしてここに在るのだから。

同じ背丈の子たちと共に過ごすのは何日目だろう？

うちのお母さんより豊かなおっぱいのお姉さんはなんだか偉そうだけど僕たちを見る目がなんだか暖かい。

たまにお姉さん同士が話す言葉はわからない時があるけど多分この人達は頭がいいんだろう。

「さあ、そろそろ時間ですよー」

次第にみんなが眠りから起きだす。

僕は退屈なお昼寝の時間をたそがれながら過ごした。

はあ…僕、お家以外で眠れないんだよなあ。

明日がこい！（前書き）

「はいそれじゃあみなさん、お歌を歌いましょー」

『はい！！！！』

みんなはお歌が大好きらしい。

まあ僕も好きなんだけど、こんなにはしゃぐ程でもない。
うまく歌えないし、それにちよっぴり恥ずかしいからだ。

「ねえとおくんは歌わないの？」

「ちずるも歌わないのか？」

「へ？あわわ！歌う！あーしたーがーこーいー。」

「歌詞違ってるし」

「もう！とおくんうるさい。」

「ちずるから話しかけてきたんだろ？」

「うるさいなあ！あたしは歌うもん！とおくんさっきからボーっとしてるよ？」

「ちよっと思えごとをしていただけさ」

「わーまた大人ぶってる」

「ちずるがガキすぎるんだよ」

「4さいだからガキだよ!!」

こんなやりとりを毎日のようにやっている。

それを暖かい目で見ながら何も言わないお姉さんも楽しそうだ。

実際この保育園に来てから僕は笑うようになった。

少なくとも友達とお話することがこんなに楽しいものだとは知らなかった。

「上手く歌えましたね」

『はい!!!!』

「おトイレに行きたい人いるかなー?」

「ぼくおトイレ行きたい」

「私も」

「おトイレに行きたい人は行ってもいいですよー」

「ちずるは行かなくていいのか？」

「さっきいったからいいよ。それよりとおくん、さっきの考えことって何？」

「へ？」

少し驚いた。

ちずるが食いついてきたのは意外だった。

こいつはお歌と食べ物以外のことは頭にないやつだと思っていたが
そうではなかった。いや、単にそういう話だと勘違いしたのか？

「ちよつと…旅をしようと思ってだな。」

「ふえ？たび？すごーい！ねえねえあたしも連れてってー」

「え？ああ、いいよ。」

「やったあー」

しまった。まさかのっかってくるとは。

って、本気で思ってるわけないか。だって僕達まだ4さいだし。

「あとな、ちずる！俺の名前はとおじゃなくて―」

「とおくんいつたびに行くの？」

「えっ？あ、明日かな。」

「わかったー準備しとくね。」

本気…なのか？

明日がこい！

初めての日…なんて覚えていないけど最近だってことはわかっている。

僕は今こうしてここに在るのだから。

同じ背丈の子たちと共に過ごすのは何日目だろう？

うちのお母さんより豊かなおっぱいのお姉さんはなんだか偉そうだけど僕たちを見る目がなんだか暖かい。

たまにお姉さん同士が話す言葉はわからない時があるけど多分この人達は頭がいいんだろう。

「さあ、そろそろ時間ですよー」

次第にみんなが眠りから起きだす。

僕は退屈なお昼寝の時間をたそがれながら過ごした。

はあ…僕、お家以外で眠れないんだよなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5620p/>

いつの日かの思い出(仮)

2010年12月18日14時22分発行